



センメルワイスを訪ねて

—産褥熱にまつわる失意と栄光—

沖縄県総合保健協会

金城 忠雄

医学生の時、産婦人科の講義で、産褥熱の項目で必ず出てくるのが、ウィーン大学のセンメルワイスの手洗いの話である。分娩時の手洗をすることにより産褥熱は激減した。しかし、上司のクライン主任教授の反発にあい、大学を辞めさせられ失意のうちに故郷のハンガリーに帰ってしまった。後に、ペスト大学教授となり、この実施により母体死亡率は激減したが、生前には医学界では認められることはなかった。後年、精神を病み、ウィーンで精神病院に入院した。リスターの消毒法、パスツールやコッホの細菌学の登場する以前の話である。

時がたち、私も看護学校において産婦人科の講義を受け持つことになった。産褥熱の授業には、常にセンメルワイスの業績と悲劇を話し講義してきた。何時の日か、彼の地ハンガリーを訪ねたいものだと思い描いていた。

とうとう、その時がやってきた。写真はその時のもの。(写真1) 彼が勤務していたというブタペスト St.Rochus 病院前のセンメルワイス母子像である。センメルワイスと、彼を見上げる母と子の非常に印象的な母子像である。



写真1 ビダペスト センメルワイス母子像

平成20年10月、全国公私病院連盟 星和夫顧問—青梅市立総合病院名誉院長—の「栄光のウィーン医学」のお誘いに乗った。センメルワイスにとっては、失意と恨みのウィーンと思うが。

ウィーンでは、ヨゼフィーヌム医学史博物館の皮膚科のヘブラ、病理のロキタンスキー、診断学のスコダ、外科医ビルロート等の蒼々たる医学者の足跡に感銘を受け、その後、ハンガリーはブダペストへ向かうことになった。

バスでドナウ川沿いの、風力発電プロペラの乱立する、見渡す限りの平原の中を4時間かけ、ブタペストへの行程である。視界の限りの平原を見て、ハンガリーが農業国であることを実感した。車中、星和夫先生の解説とセンメルワイスについての文献を参考に、彼の業績に対して、失意と栄光についてのひとこまを追ってみることにする。

センメルワイスは、1818年ハンガリーのブタペスト生まれ、ペスト大学とウィーン大学で医学を学び、ウィーン総合病院の産科に勤務、教育と診療に携わっていた。ウィーン総合病院の産院は、医師や男子学生の受け持つ第1病棟と、助産婦が受け持つ第2病棟に分かれていた。センメルワイスは、男子学生の第1産科病棟の母体死亡率が高いのに気づいていた。センメルワイスの集計では、ウィーン総合病院第1産院の産褥熱による死亡率が11%を越えていたのに対して、第2産院の死亡率は、3%弱であることを確認していた。産院病棟の双方の違うところは、男子学生は解剖実習からそのままの状態分娩を扱い、助産学生は解剖は扱っていなかった。

彼は、第1産科での高い死亡率は、解剖の有害影響の結果であると確信したが、クライン教授はその説には同意していなかった。その上、クライン教授は、解剖教育には非常に熱心であった。

原因究明の突破口になったのは、親友コレチカ法医学教授の死であった。解剖の際、腕に傷をつけ産褥熱と同様な症状で急死してしまった。そのこともあり、教授と相談せずに、医学生には厳重な手洗いを強制した。手洗いをすることによって、第一産科での母体死亡率が激減した。

その事実は、皮膚科学のヘブラが、センメルワイスの発見はジェンナーの種痘法と同様の偉業であるとウィーンの医学誌に投稿、彼自身が発表したのではなかった。この事実は、病理解剖学のロキタンスキー教授や診断学のスコダ教授も高く評価していた。

一方、上司クライン教授は、このことを快く思っていなかった。センメルワイスの助手の期限が切れたのをいいことに、ウィーン大学を辞めさせ追い出してしまった。彼は、1850年、ウィーン大学を失意のうちにハンガリーに帰ることになった。

ハンガリーでは、St.Rochus 病院の産科医として職を得た、ウィーンでの同様な診療を継続して母体死亡率は減少した。1855年には、請われてペスト大学に勤務、後に教授に選任された。教授の肩書きを得たことで、積極的に活動し1861年「産褥熱の原因、概念および予防」を発表、手洗いを徹底させることで、産褥熱による母体死亡率を0.85%にまで激減させた。外科医にも手洗いや、医療器具の洗浄を熱心に勧めたらしい。彼への賛同者もかなりいたが、当時の医学界には受け入れられなかった。特に著名な病理学者ウィルヒョウなどの頑迷で大物の賛同が得られないだけでなく、彼の説が否定されてしまった。

彼は孤独になり、とうとう精神に異常をきたしたらしい。たまりかねて、彼の妻のマリアは、ウィーン大学の恩師ヘブラ教授へ相談し、教授のすすめもあり、ウィーン精神病院に入院させた。1865年絶望のうち、享年47歳で亡くなってしまった。その生涯は哀れであり同情を禁じえない。

彼が死亡した年1865年にリスターの消毒法発表、細菌学は、彼の死後10年経って1876年以後、やっとパスツール、コッホの時代が到来したのである。

現在では、オーストリアにおいても、ヨゼフィーヌム医学史博物館に、ウィーン医学の巨星ビルロートのすぐ傍にセンメルワイスの資料が展示され、十分敬意を払われている。母国ハンガリーにおいては、旧ペスト大学医学部は、センメルワイス医科大学と改称され、医学博物館や街路も、彼の名称が送られており、まさに英

雄として称えられている。

センメルワイスの生涯を思うと、人生は、波長の合う人と仕事をしないと不幸である。上司がクライン教授のように、意固地で偏屈者であると悲劇である。上に立つものには、「そんな考え方もあるのか」と包容力を持って指導して欲しいものである。

一方、センメルワイスにも謙虚さ気配りが足りなかったのではないかとも思う。現況を変えることは、容易いことではなさそうだ。

現在、生家は、センメルワイス医学博物館として保存されて世界中から見学者が訪れている。博物館の展示の中に「彼の論文」が、厳かに展示されている。医学博物館の裏庭には、センメルワイスの墓標と墓地があり、静かにお墓参りをした。(写真2)



写真2 医学歴史博物館裏庭の墓標

話題を変えて、当地のワインについて、ガイド嬢が「エグリ・ビィカベル」は極上でうまいと。ハンガリーがオスマントルコ軍に攻められた時、イスラム教は禁酒のはずだが、これは酒でなく「牡牛の血」だと称してしたたか飲んだらしい。私も「エグリ・ビィカベル」を、苦難のハンガリー史を頭で追いつつ、道中このハンガリーワインを堪能した。

コーディネーター星和夫先生の博覧強記の表現力には、尊敬と憧れを抱かずにはおれない。産褥熱対策に情熱を注いだセンメルワイスの苦勞を偲び、若かりし頃の講義時間をも思い起こし、心も豊かに充実したい旅であった。



雑感  
‘アルジャーノンに花束を’

新川クリニック  
宮城 政剛

人の記憶というのは、はなはだ不明瞭なものである。この‘アルジャーノンに花束を’という本を友人から貰ったのを僕は29歳の誕生日と記憶していた。しかし久しぶりに本を手にとってみると、‘チャーリーと同じ年になる政剛、32歳の誕生日おめでとう’と書かれていた。高校以来の付き合いであるその友人は一風変わった人で琉球大学を卒業した後、外資系企業に入社、その後独学でカリフォルニアのパークレア大学入学、gerontology専攻、アルツハイマー病について勉強した経歴を持つ。ちなみにgerontologyとは老年学のことだそうだ。この友人から貰ったこの本のことを折に触れて思い出す。何故彼がこの本をプレゼントしたのか？本の感想でも話しながら会いたいと思いつつも何年も経ってしまった。

この本の主人公は、チャーリーという32歳で幼児並みの知能しか持たない知的障害者の青年である。物語はその青年の視点から経過報告という形で綴られている。今までの生き立ちがそうさせるのか、それが彼の生きるすべであるのか、誰にでも親切であろうとする人のいい青年であった。幼児並みの頭脳しかないチャーリーはパン屋で働くものの友達と思っている同僚からは騙され、馬鹿にされている。しかしそのことが理解できないため周りの人々とはうまくやっていっていた。チャーリーは少しでも頭がよくなりたいという思いから精神遅滞者専門の学習クラスで勉強を続けていたが、ある時、監督者の大学教授から開発されたばかりの脳外科手術を受けるようすすめられ、いくつかの検査を経て脳外科手術を受けることになる。手術後知能を回復しチャーリーのIQは68から185に

まで上昇し超知能を持つ天才となる。幼児並みの知能しかなかったチャーリーは自分の複雑な生き立ち、境遇、職場で今までは知らずに過ごしていた真実を知るようになる。頭が良くなりすぎたが故に周囲と問題を起こし、これまでになかった孤独感を感じ始める。その事実で苦しむ問題を解決しようとするが、そのことが返って周りとの問題を引き起こし、ますます孤立していく。そんなある日チャーリーより少し前に脳外科手術を受け超知能を持ったアルジャーノンという名のねずみに変化が起きてきているのに気付く。チャーリーはアルジャーノンの知能の変化を見ながら自分の変化を予測しつつ物語は展開する。必死に原因を探るチャーリーだが退行する知能の中で原因を突き止めることなく元の幼児並みの知的障害者へ戻ってゆく。

彼は経過報告日誌の最後に、正気を失ったまま寿命が過ぎてしまったアルジャーノンの死を悼み、手術を施行した教授へのメッセージとして‘アルジャーノンのお墓にお花を上げてください’と締めくくる。

‘アルジャーノンに花束を’、原題 Flowers for Algernonはアメリカ合衆国の作家ダニエル・キイスによるSF小説で、1959年に中編小説として発表し1966年に長編小説として改作された作品である。物語の流れ自体も面白ければ、文体が経過報告という主人公の文章という形で綴られているため、幼稚な文章から洗練された文章にすすみ、主人公の苦悩とともに幼稚な文章へ戻っていく。その文体を読んでも主人公に起こっているであろう脳内の変化を読み取ることができ、それがもう一つ物語を面白くさせている要因である。この本を読んでいくうちに気付くことは、チャーリー自身とまわりのチャーリーに対する変化というのは何も本の中の特別な変化ではないのではないかということだ。人の一生で起こるさまざまな問題を手術前、後の変化で濃縮された形で急激に体験したと考えることができるのではないか？

身近なところでは琉歌の世界を見てみると、次のような歌から我々の身近でも起こりえる

ということが類推することができる。‘<sup>さか</sup>盛い<sup>うとうる</sup>衰いや夏<sup>ふゆ</sup>と冬<sup>くる</sup>心<sup>かい</sup>繰り<sup>がい</sup>返し<sup>ぬが</sup>返し<sup>ぐ</sup>逃り<sup>ちよーてー</sup>苦り<sup>ひだ</sup>しや’ 歌意：夏と冬が交互に巡って来るように、人の世の中の栄枯盛衰もまた、その繰り返しから逃げることは出来ない。今まで ‘いちやりば兄弟、ぬ隔ていぬあいが’ が沖縄の人の思いと思っていたが、やはり世の常である、共同体のつながりが強い沖縄でもある程度周囲の協力が得られたにせよ人が生きていく上で栄え衰えとはかならず起こりえることであり当事者本人は辛酸をなめたはずであり、周りの状況はある程度の差こそあれチャーリーと同じ状況を経験したであろうことは想像に難くない。するとこの本に書かれている内容が人の世において普遍性を持った真実として迫ってくる。その思いでもう一度本を開いてみた。するとプロローグにプラトンの‘国家’の一部が抜粋されて載っているのが目に入った。以下一部抜粋

常識をもつ人ならだれでも、目の混乱には二とおりあり、そして二つの原因から生じることを思い出すであろう。すなわち明るいところから暗いところへ入ったために生じるか、または暗いところから明るいところへ入ったために生じるかである。このことを覚えている人ならば、洞察力の混乱し弱まっている人を見たときに、そうむやみに笑えないであろう。

このプラトンの‘国家’を読み終えた時点で作者の意図する意味がわかるような気がした。作者は作品を通し、またプラトンの‘国家’を引用してそのような困惑した人々への対応を考えることを問いかけているのではないか。そのことに気付くと同時に頭の隅にあったもやもや感とは本をくれた友人とこの本のつながりが見えてきたとともにはれてきた。この本が問いかけるものは、多方面からの解釈が可能であろう。しかしプラトンの‘国家’と結びつけるとき社会的弱者への共感を持つことを訴えていると解釈できるのではないか？またこの本をプレゼントしてくれた友人は医者になったからといってその座にあぐらをかかず、常に努力し医師としての本懐をとげ、社会性も持ちながら患者の立場に立った医療をしてくれというメッセージを、本を通じて伝えたかったのではないか？‘弱いものの立場に立ち医療をする、患者さんの立場に立って医療をする’とは医師になってから何度となく聴く言葉である。勤務医時代は忙しく、患者に追われている感があった。今は開業医となり外来により多くの時間を割くことができ若干、患者を追っている感が無きにしもあらずではあるが、この本のことを思い出すたび患者の立場に立ち共感を持つという初心を問われている気がする。





シニア・ワインエキスパート  
受験顛末記

北中城若松病院  
吉田 貞夫

私は、5年前に日本ソムリエ協会のワインエキスパートに合格し、この度、さらに上級のシニア・ワインエキスパートを受験、無事合格することができました。聞くところによると、シニア・ワインエキスパートの合格者は県内で初だそうです。この場を借りて、その顛末を記したいと思います。

私とワインの決定的な出会いは、35歳を過ぎてからです。それまで私は、スーパーでお買い得価格で売っているようなワインを飲むレベルで、ワインを本格的に勉強するなんてことは、あまり考えてもみませんでした。しかし、まだ茨城県内に住んでいたころ、とあるレストランで飲んだワインが、喩えようもなくおいしかったのです。当時、何の知識もなかった自分は、その感動をどう表現していいかわかりませんでした。私の医学の師匠で、元筑波大学教授の紅露恒男先生（写真1）は、ワインにも大変造詣が深く、かねがね「ワインというものは、ヨーロッパの文化と深く結びついている」とおっしゃっていました。「文化としてのワイン」を理解することができたら、どんなに素晴らしいことだろうと思ったのです。



写真1

まさにこうした出会いの瞬間にワインを注い  
てくれたのが、私のワインの師匠になってくれ

た石橋靖子さん、2005年全日本最優秀ソムリエコンクールのファイナリストです。思い立ったら直ちに行動。柄にもなく、ワインエキスパート受験を決め、勉強を始めることにしました。それからは、ワインはすべて銘柄を隠して注いでもらって、その香りや味の特徴、考えられるブドウの品種、産地、作られた年代などを言い当てるトレーニング、いわゆる、ブラインド・テイスティングです。一緒に食事に行った人は、少々面食らったかもしれません。のちに沖縄に引っ越す際、石橋さんからお饞別にいただいたワインは、やっぱり…、ラベルが剥がされていました。「卒業試験」ということでしょうね。

こんな経緯でワインの勉強を開始し、1年後、ワインエキスパートに合格。その後、ご縁があって沖縄に移住してきました。ここで大きな変化がありました。沖縄に移住するや、自分は、たちまち泡盛の虜となり、泡盛マイスターの資格を取得することとなったのです。泡盛マイスターを取得する頃から、ワインの方は若干お留守になっていたことは否めません。今回受験するにあたって、このブランクは非常に痛かったです。

さて、シニア・ワインエキスパートの試験ですが、これはかなりの難関です。昨年度の合格率は49.2%。素人が受験しているのではなく、有資格者が受験して、この合格率ですから、侮れません。問題は、ブドウの栽培、ワインの製造、世界各国のワイン、ワインの法律、ワインの歴史、そして、公衆衛生も出題されます。職業柄、公衆衛生でのミスは絶対に避けたいところです。もちろん、テイスティングの試験もあります。ご興味のある方は、インターネットで試験問題が公開されていますので、ぜひチャレンジしてみてください。

平成21年度日本ソムリエ協会シニア呼称資格  
認定試験問題

<http://www.sommelier.jp/mf/m/jsaweb/file/10150>

試験の勉強を始めてみると、ブランクの5年の間に、イタリアでは、DOCGという格付けのワインが24銘柄から42銘柄にも増えていたり、フランスの地酒 (Vins de Pays) のカテゴリーが大幅に改訂されていたり、とにかく、意外なところで浦島太郎のようになってしまっていることに唾然。どんな分野でも、知識のブラッシュ・アップというのは大切なようです。

さて、試験当日、会場には、顔なじみのソムリエ協会沖縄支部のみなさんが…。不合格だったら、みなさんにバレてしまうので、相当格好悪いです。背水の陣で試験に臨みました。まずは筆記試験。例年より難しく、手こずりました。続いてのテイスティングは、本当に苦戦で、冷や汗をかきました。1つ目のワインは、グリュナー・フェルトリナーというブドウで作ったオーストリアの白ワイン。特徴が捉えにくいワインでした。一瞬、その選択肢も頭をよぎりましたが、「決断する勇気」がありませんでした。2つ目のワインは、フランスのシャルドネ、3つ目のワインは、イタリア。ここは、かろうじて正解です。蒸留酒は、さくらんぼで作ったキルシュでしたが、何度も香りを試しているうちに、わけがわからなくなりました。こういう場面では、精神面がもっと強くなければダメだと痛感しました。

テイスティングの試験の結果が思わしくなかったもので、試験終了後はかなり落胆しました。昔、「違いのわかる男」というCMがありましたが、これではまるで「違いのわからない男」だよなあ…。結果が届くまでの数週間、悶々とした日々でした。仲良くさせていただいているソムリエの方々が、本当に暖かい言葉で励ましてくれました。ウルツとききました。沖縄で、こんな優しい仲間にもまれて、本当に幸せ者です。合格の発表をみたときは、とてもうれしかった反面、何かの間違えだったらどうしようと、半信半疑でした。つい先日、認定証とバッジが送られてきました。満面の笑みを浮かべた

写真をごらんください (写真2、3)。



写真2



写真3

ワインを勉強してよかったこと、それは、自分の世界が広がったということでしょう。食べ物の上にせよ、生活の上にせよ、それまで自分が知らなかった世界を垣間見ることができました。ワインは、製造とか、分析という面からみれば「科学 “Science”」ですが、「技術」、「芸術」といった “Art” の側面も強く感じさせる飲み物です。そして、ワインとの出会いは、すなわち、「人との出会い」です。ワインを作る人、それを輸入して販売する人、レストランでワインを注いでくれる人、そうした一人一人との出会いが、経験を豊かにしてくれると思います。「科学」であり「芸術」、そして、「人との出会い」。何か、医学とも共通した部分があるようにも思えてなりません。

# 沖縄県医師会広報委員会内規

(昭和56年3月18日委員会承認)

## 1. 沖縄県医師会報の目的

会報は、会員に対する会務の動静並びに、医療関係情報の伝達手段であるばかりでなく、会務に対する会員の意見提言及び文化活動、学術研究発表の媒体ともなる重要な会誌である。

更に会報は、本会の地域医療対策、その他について県民及びマスコミ関係者に広く情報を伝達広報することを目的とする。

## 2. 編集方針

- 1) 会報は毎月発行とし、必要あるときは号外を発行する
- 2) 記事は医学及び医療に関する記事
- 3) 日医、県医、地区医及び関係団体の活動に関する記事
- 4) 会員親睦に関する記事
- 5) 諸告知、事務局記事
- 6) その他広報委員会で認めたもの

## 3. 編集規定

- 1) 会報の編集は広報委員会で行う
- 2) 委員には地区代表者をもってあて、担当理事が委員長となる
- 3) 原稿の採否は広報委員会が決定するが、次のものは掲載しない
  - (イ) 無署名のもの
  - (ロ) 長文過ぎるもの
  - (ハ) 判読し難いもの
  - (ニ) 著作権にかかわるもの
  - (ホ) 個人的攻撃や中傷にわたるもの
  - (ヘ) 個人のプライバシーや名誉にかかわるもの
  - (ト) 道徳・法律に抵触するもの
  - (チ) 紛争を招く恐れのあるもの
  - (リ) 表現が不穏当たるもの
  - (ヌ) 会員に周知を要しないもの
  - (ル) 他誌に掲載済みで特に必要性を認めないもの
  - (ヲ) 県医師会の方針に著しく反するもの
  - (ワ) 県医師会の品位にふさわしくないもの
  - (カ) その他前各号に順じ広報委員会が不相当と認めたもの

## 4. 広 告

広告は沖縄県医師会報の品位、及び体裁を損なわぬものとし、採否については広報委員会で審議のうえ決定する

5. この内規の改廃について広報委員会の議を得なければならない

6. この内規は昭和56年4月1日より施行する

# お知らせ

女性医師部会メーリングリストへの登録が未だの先生方は是非この機会にご登録をお願いします。  
登録方法は下記登録票に必要事項をご記入の上、FAX (888-0089) にてお申し込みください。

## 女性医師部会メーリングリスト登録票

沖縄県医師会では、近年、女性医師増加に伴うさまざまな問題に取り組むため、平成 19 年 8 月より、沖縄県医師会女性医師部会を立ち上げております。

今般、女性医師部会では、女性医師の再就業・再研修のためのネットワーク構築に努めるべく、今年度より「沖縄県女性医師バンク事業」の実施に向けて準備を開始したところです。

また、女性医師部会では、女性医師のみなさんとの情報共有や伝達を目的とした独自の連絡網（メーリングリスト）を確立しております。

つきましては、今後、さまざまな情報を配信していきたいと考えておりますので、この機会にメールアドレス等の連絡先の登録をよろしくお願い致します。

なお、今回いただいた連絡先は特に公表するものではなく、医師会からの連絡のみに使用いたしますので、可能な範囲でご記入下さい。

ふりがな 氏 名	-----		
住 所	〒 -		
連絡先	電 話 :	( 自宅 ・ 所属施設 )	
	E-mail :		
施設名	(所属のある方はご記入下さい)		
現在の状況	①就業中 ②休職中 (産休・育休・病休) ③離職中 ④その他 :		

- ※沖縄県医師会女性医師部会からのサポートです。
- ※女性医師部会の女医がご相談に応じますので気軽にご相談下さい。
- ※個人情報保護法に則り厳正に取り扱います。
- ※連絡先が変更になった場合は沖縄県医師会事務局まで連絡下さい。

《登録申込先》  
 沖縄県医師会女性医師部会  
 (崎原、山城満子、仲本)  
 〒901-1105 南風原町字新川 218-9  
 TEL.098-888-0087 FAX.098-888-0089  
 oma-joibukai@okinawa.med.or.jp